

水族館の「宿泊イベント」の現状と課題

0012504 大釜 一晃

指導教員 市川智史教授

1. はじめに

水族館は、博物館法には明確な規定はないものの、自然系博物館の1つとされており、社会教育施設として教育的活動が求められている。水族館においては、水族の展示の他、海や川での生物調査や生態系に関する講座、タッチプール、バックヤードツアー、飼育員の仕事体験などの教育的活動が行われてきた。近年、「水族館に泊まろう」等の名称で、水族館に宿泊し、夜の魚の様子を観察したり、始業前の水族館の様子を見たりする「宿泊イベント」が行われている。普段見ることのできない夜の水族の生態や、水族館の裏側を見ることができる「宿泊イベント」には教育的意義があると考えられるが、その現状や課題を明らかにした先行研究は見当たらない。そこで本研究では、水族館の「宿泊イベント」に焦点を当て、現状と課題を明らかにする。

2. 方法

現状を把握するため、日本動物園水族館協会加盟の水族館 62 カ所 (2015 年 12 月 7 日現在) を対象に、2015 年度に「宿泊イベント」を行った 16 カ所の水族館のウェブサイトから情報を収集した。掲載されていない内容に関しては電話で問い合わせを行い、電話、電子メール等で回答を得た。把握した情報は、運営母体、目的、プログラム概要、募集対象、実施日、回数、回数設定理由、倍率、参加費である。また個別事例として、運営母体の観点から選定した神戸市立須磨海浜水族園と海遊館の 2 カ所を対象に調査を行った (須磨海浜水族園はインタビュー調査、海遊館は電子メールでの回答)。

3. 結果とまとめ

実施日は、夏休みが 1 番多く、次いで 5 月、9 月の連休が多かった。これは募集対象 (親子が多い) を考慮しているためと考えられる。倍率は、最大で約 20 倍、平均で約 10.2 倍となっており、「宿泊イベント」は人気が高いことを示している。

教育的目的ととらえられる「夜の生き物の生態を知ってもらうこと」を挙げているのは 5 カ所だけであった。一方、「非日常的な体験をしてもらうこと」を目的として挙げている水族館が 5 カ所見られた。非日常的な体験には教育的意義があると考えられるものの、単に宿泊体験を目的としているのであれば、レクリエーション的色彩が濃くとも受け止められる。「宿泊イベント」は、教育的活動として明確に位置づけられていない可能性が高いと考えられる。社会教育施設と位置づけられている水族館において、「宿泊イベント」の目的を教育的観点から明確化することが課題として挙げられよう。

プログラムは、「夜間の生き物の観察」、「水槽前での就寝」を中心に構成されていた。水族館に宿泊するからにはこの 2 つは必須と言える。一方、生き物の朝の様子を見ることも「宿泊イベント」ならではと考えられるが、朝の時間を利用したプログラムを行っているのは 5 カ所だけであった。生き物の生態を学ぶ上では、夜、朝、昼を通して観察することが重要だと考える。宿泊後の朝のプログラムの充実が課題として挙げられよう。

また、2015 年度に「宿泊イベント」を行った水族館は協会加盟の 62 カ所のうち約 4 分の 1 と少なかった。倍率が高いことも勘案すれば、より多くの人が参加できるような方策が求められよう。